



総合バンキング システム

今日の銀行は、大衆中心の運営に向かい、多様化した大量の情報処理を電子計算機を用いたシステムで行ない、効率の良い経営とサービスの向上を目指している。

銀行業務のシステム化は、まずその3大業務である預金、為替、貸付など個々の科目処理を中心として行なわれ省力効果を第一義としていたが、その後、多科目処理から科目間の有機的な結合を処理する形態をとり、今日では銀行の主要業務のほとんどを含む総合バンキング システムに発展、拡充されつつある。中でもオンライン化は目覚ましく、為替システムから預金システムへの自動振替、預金システムと結合した貸付システムのオンライン化というように、顧客情報ファイル(CIF)を中心として、有機的な情報処理が展開され科目間総合取引処理及び口座振替

処理などが可能になった。

このことによって、遠隔地の預金口座への送金、消費者ローンによる月賦返済の速やかな処理、電話料金をはじめとする各種料金の口座振替、残高不足で引落としが不能の場合でも当座貸越ができる総合口座制度、一般企業で既に利用され始めた、現金扱いの不安のない給与振込制度などが実施され、顧客への高度なサービスを具体化するとともに、情報システムの確立を行ないつつある。このような新しい銀行機能は総合バンキング システムによって初めてできたことで、また最近では現金自動支払システムも加わり、サービスの向上は一段と高まっている。

日立製作所はオンラインシステムを稼働させている銀行のうち、約25%の銀行にオンラインシステム一式を納入しているが、そのうち大規模なシステ

ムを例にとると、これは甲所、乙所の二大センタで構成され中央処理装置はデュプレックス システムをとるとともに、地域別に分割して収容するロードシェア方式をとっている。センタと営業店は電電公社回線で結ばれ、端末には為替・預金端末、現金自動支払機、キャラクタディスプレイが設置されている。

中央システムの障害は銀行機能の停止につながるので、すべてのハードウェア、ソフトウェアには、高度の技術が駆使され細心の配慮が払われている。

今後の総合バンキングシステムは、更に大容量化、多様化、高度化するであろうが、あらゆる情報を集中化したデータベースを基礎として、顧客への情報提供サービス、銀行経営の意志決定に必要な経営情報システムの開発などが期待されている。すなわち、量から質への転換である。

